

みよしげんべえ いぶきちょう

三好源兵衛さん (伊吹町)

昔、ある暑い夏の日、伊吹島の十三・四才の嘉左衛門という人が、江戸(今の東京)浅草の観音様におまいりに行きました。

ちようどお寺では、将軍様(一番えらい殿様)が、近いうちにご参詣(お寺にお参りに来る)なさるといので、本堂の掃除を
している真つ最中でした。本堂の大屋根には、大ぜいの人があるようにむらがつて、かわらのこけを一枚一枚こすり落として
きれいにしていました。お参りをすませた嘉左衛門さんは、日かげで一休みしながらそれをながめていましたが、

「お江戸はいかさま(とても)ひまな人が多いようだ。あの大屋根のかわらを一枚一枚掃除していたら何
日かかるだろうに、なんと知恵のない人たちだろう。おいらだったら十人で二時(今の四時間)もあ
ればすませてしまうのになあ。」

とひとり言をつぶやきました。

すると、そばで作業をさしずしていた小頭風(現場監督)の侍がこれ聞いて、

「今の言葉聞きすぎてならん。こっちへ来い。」



と言いました。そして、嘉左衛門さんは寺のひとすみにしらえた作事場（作業をするところ）の監督をする役人のところにひつたてられていきました。

監督の侍は、連れてきた侍から事情を聞き、まだ幼い顔のかしこそうな嘉左衛門さんを見て、やさしく、「どうしたらあの大屋根のかわらが早くきれいにできるか、おまえだったらどのようにするのか。」

とたずねました。そこで、嘉左衛門さんは、

「浅草のりを水にといて、十人くらいにおけとひしゃくを持たせて大屋根のてっぺんから流させてみるがよい。」

と答えました。役人はくわしくその理由を聞いたうえで、嘉左衛門さんの言うとおりにしてみました。すると、嘉右衛門さんが言ったとおり二刻ばかりで大屋根の掃除が終わり、見ちがえるほどきれいになりました。おおいに面目をほどこした（高い評価をえること）嘉左衛門さんは、この監督のお侍の推挙（その人を仕事につけるよう話をする）によって、そのの殿様にめしかかえられ、名前を三好源兵衛と名になりました。

源兵衛さんは、後々、その才智（才能や知恵）や力が認められ勘定奉行（藩の財政の長官）にまで出世しました。そして、後に、生まれ故郷の伊吹島に帰り、島のために尽くし、人々からその人徳を慕われたと言われています。